

存在確定診断としての血清 PTH 測定は、測定法の進歩による感度・精度の向上により %TRP・NcAMP 以上の高い有用性を示した。

局在診断法では、小さい腫瘍または異所性の腫瘍では^{99m}Tc-²⁰¹Tl サブトラクショントラック、静脈血サンプリングが有用と思われた。静脈血サンプリングは他の画像診断法に比して、その侵襲性、手技、判定等に問題点は多いものの、本症の術前局在診断法として、^{99m}Tc-²⁰¹Tl サブトラクショントラックとならんで重要と思われた。

3) MEN-I 型 2例の副甲状腺機能亢進症

古川 浩一・丸山 佳重
中山 倫子・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
筒井 一哉 (新潟病院内科)
鈴木 正武・角田 弘 (同 病理)

Zollinger-Ellison Syndrome (以下、ZES) を伴い、副甲状腺機能亢進症を合併した MEN-I 型を 2 例を経験しました。症例 1 は 48 歳、女性。S.51 年 ZES、副甲状腺機能亢進症も併発し、副甲状腺切除術、胃全摘施行。再び、血清 Ca 高値。63 年再入院。精査の結果副甲状腺機能亢進症再発にて、手術。胸腺内の異所性副甲状腺を左の胸腺と共に切除。組織所見は腺腫あるいは、過形成と診断。症例 2 は 44 歳、女性。S.54 年 ZES、下垂体腫瘍のプロラクチノーマの診断。胃全摘、空腸置換術、三管合流部腫瘍摘出 (ガストリノーマ)。Hardy の手術。H.1 年 6 月巨赤芽球性貧血および PTH 高値にて入院。精査の結果副甲状腺機能亢進症。甲状腺直下の副甲状腺を全摘。組織学上腺腫の診断。MEN-1 型に発症する副甲状腺機能亢進症のスクリーニングは、年 1 回程度の高 Ca 血漿、高 PTH、腎性 c-AMP の増加、高 Cl 性代謝性アシドーシスの証明等が有用で、胸腺上極の切除を含めた縦隔内の検索の必要性を示唆する症例であった。

4) 自己免疫性甲状腺疾患患者の出産前後における甲状腺機能の検討

荒川 直子・吉岡 光明
山川 能夫・斎藤 秀 (県立中央病院内科)

当科外来で経験した自己免疫性甲状腺疾患の出産例の実態について報告した。〈対象〉昨年 1 年間に出生したバセドウ病 7 例、慢性甲状腺炎 3 例。〈結果〉妊娠時、治療中の症例は 9 例であった。妊娠初期に甲状腺機能低下していた 1 例で流産したほかは、妊娠転帰は良好であっ

た。出産前後で甲状腺機能が安定していたのは 5 例、出産後一過性甲状腺毒症を生じた症例は 4 例で破壊性甲状腺毒症のためと思われた。2 例で TsAb が軽度上昇を認めたが、MCHA、TGHA、TBII は、いずれの症例でも有意の変動をしめさなかった。治療途中で妊娠し経過中に治療薬の減量、中止をした症例に出産後の甲状腺毒症を多く認め、寛解期または維持量となるまで避妊指導の徹底が必要と思われた。

付記：PTU 服用中の授乳は 4 例中 3 例で不可とされていた。授乳の可否について施設間の見解の統一が望ましい。

5) 中鎖脂肪酸トリグリセライド (MCT) 著効の I 型高脂血症

斎藤 康・白井 厚治
吉田 尚 (千葉大学第二内科)

高カイロミクロン血症は時に膵炎による強い腹痛を伴うことが知られている。この原因にはリポ蛋白リパーゼ (LPL) 欠損症やアポ蛋白 C-II 欠損症が知られている。これらに加えて私共は LPL 機能異常により発生することを報告してきた。症例は 14 才の女児で中性脂肪の上昇に一致して膵炎をくり返していた。LPL 活性は見られなかったが抗 LPL 抗体に反応する蛋白は存在していた。また、活性中心は保持していた。このことから本症は LPL の基質認識異常症と診断した。この LPL は MCT を含むリポ蛋白トリグリセライドを分解できることがわかり患者に MCT を投与したところ血中トリグリセライドはほぼ正常化できた。

6) 当院の最近十年間における内分泌代謝疾患の概要

一血清電解質異常を中心として一

星山 真理・生垣 浩 (柏崎中央病院内科)
星山 圭鉦・金沢 光男 (同 外科)
高峰 利充 (同 泌尿器科)

1980 年 4 月から 1990 年 2 月にかけて、対象人口 10 万の小都市の一般病院で体験しえた内分泌代謝疾患のうち興味ある 23 例について、血清電解質異常を中心にまとめた。内訳は、高 Na 血症 (松果体腫瘍による二次性前葉機能低下症、尿崩症、不飲性高 Na 血症、高浸透圧性非ケトン性昏睡) 3 例、低 Na 血症 (プロラクチン産生腫瘍、慢性甲状腺炎) 2 例、低 K 血症 (原発性アルドステロン症、クッシング症候群、尿管輸送異常症一